

ヒマラヤのテント植物とセーター植物を訪ねて ～東チベットとブータンのフラワートレッキング～

熱 田 健

我々が高山植物（高緯度植物）と呼んでいる仲間に、その厳しい環境から、植物体を守るために組織自体の耐寒性を得ると共に、花や実を守るため、様々な形態を進化させて、究極の草姿を得た一群の植物がある。ヒマラヤ山脈の厳しい気象条件下で独特の進化を遂げたある種をさして、俗にテント植物とかセーター植物と言われている。前者の代表がレウム・ノビレ（セイタカダイオウ）とサウスレア・オヴァラータ、サウスレア・ブラクテアタ等の（ボンポリトウヒレン）であり、後者のそれはサウスレア・ゴッシピフォラ、サウスレア・トリダクティラ等の（ワタゲトウヒレン）である。幸いここ3年程で、その両方を見に行く事が出来たので報告したいと思う。

東チベットでテント植物に会う

先ずレウム・ノビレ（セイタカダイオウ）であるが、今から十数年前に『週間朝日百科—植物の世界』という写真集がでたのを、ご記憶の方が多と思うのだが、その中に紹介されていた。霧の中の瓦礫の斜面にスッキリと立ち上がっている真っ白な筍の様な姿を見た時は、強烈な印象を受け、いつかは本物を見てみたいと思っていた。

ゆくりなくも4年ほど前、ネパールのアンナプルナ内院のフラワーウォッチングの旅に参加する機会を得たのだが、その時に、このレウム・ノビレが話題になったのである。しかし残念ながら「ネパール側でこれを見るには、6,000 m近くまで登る必要がある」とのことだった。この時の目的はヒマラの青いケシの中で、最も美しいと私が思っているメコノプシス・ホリドウラをこの眼で見る事だった。とにかく初めてのヒマラヤのトレッキングだったので様子も判らず、ただ友人のガイドに着いてゆくだけの1週間ほどの旅だった。

気をつけてはいたのだが、殆ど全員が激しい下痢に悩まされていた。標高 5,500 mほどまで、息も絶え絶え

になって到着し、やや貧弱ではあったが、岩陰に咲くメコノプシス・ホリドウラをかるうじて見つける事ができた。同行のメンバー2人が高山病で調子が悪いため、早めに下山せざるを得なかったのだが、少し残念ではあった。

翌年はランタン谷のトレッキングに参加したりしたのだが、一昨々年、ある企画会社から、このレウム・ノビレが、チベット側なら極めて容易にウォッチング出来、参加者を募っているとの情報を得、早速参加することになった。

場所は東チベットの林芝（リンチー）付近、八一鎮（パーイー）にある標高 4,500 m程のセチ・ラ峠である。



写真1 *Rheum nobile* セイタカダイオウ 草丈 1.5m 東チベット セチ・ラ峠付近



写真2 *Saussurea obvallata* ボンボリトウヒレン 草丈 80cm
東チベット セチ・ラ峠付近

林芝までは中国の成都から空路があり、八一鎮までは車で1時間程である。そこで宿を取り、マイクロバスで、峠まで登る訳だが、東チベットは西に比べて植物が圧倒的に多く、標高3,000 m付近までは森林に覆われている。幹線道路も中国の肩入れでしっかりした物が作られ、峠超えの川蔵南路というルートも快適なドライブが楽しめる。峠は見渡す限り素晴らしいお花畑で、車を降りてすぐに、色とりどりの花々に混じって、サウスレア・オヴァラータ（ボンボリトウヒレン）の大株がそちこちに、白いボンボリを揺らして迎えてくれた。高さは70～80cmはあるだろうか、白い苞葉を撒くってみたら、中から虫が飛び出してきた。

そこから30～40分ほど水平に広い尾根道を西に辿ると、数百メートル先の瓦礫の斜面に、真っ白なレウム・ノビレ（セイタカダイオウ）が立っていた。正に息を呑む一瞬である。標高が高いので駆け寄りにはいかなかったが、見渡せばその先の広い斜面に、50～100 m間隔であっちにもこっちにも立っているのではないか。その間にも先程のボンボリトウヒレンもたくさんある。ようやく近づいて、そっと触れて見る。高さは優に2 mを超え、その見事な存在感に我を忘れて見入ってしまった。

ブータンにセーター植物を訪ねて

チベットでは2種類のテント植物を見る事ができたわけだが、そうすると、セーター植物の方も是非見たくなる。綿毛で植物体を覆う植物は、サボテンの仲間

にもあるし、ある種のウスユキソウなどの様に、殆ど毛に覆われた物も少なくない。そんな中で、ワタゲトウヒレンは稀少の極みであるし、品格、存在感において、抜きん出ていると思う。

今年の2月に、南アフリカの東側、ドラケンスベルグのトレッキングから帰って間もなく、やはり同じ企画会社から、このワタゲトウヒレンとネパールでは貧弱な株しか見られなかった青いケシ、メコノプシス・ホリドウラもたくさん見られるブータン王国でのフラワーウォッチングの新企画の案内が届いた。年に2回の遠征はいささか重く感じたが、足腰が動く内という事で、再び夫婦で参加することにした。

但し今回は今迄と違って、宿泊がホテルやロッジでなく、全行程14日の内、9泊のテント泊りという。当然その間はシャワーは無い。幸いと言うか、妻は稲毛時代のワングルの後輩で、かなり悲惨なテント生活を何度か体験している。故に臆せず参加したのだが、ちなみに今回の参加者11人の内7人は女性で、年齢も我々が最若年であった。キャラバンは我々11人の参加者と、現地のポータ10人、馬曳き7人、コック1名、ガイド頭1名、それに馬とロバ22頭という大所帯で、7月3日、ドゥゲゾンを出発した。

ブータンへはバンコクからバングラディッシュのダッ



写真3 *Cypripedium himalaicum* ヒマラヤアツモリソウ 草丈 25cm
ブータン王国 ジャンゴタン付近

写真 4

Saussurea gossypiphora ワ
タゲトウヒレン ブータン
王国 ポンテ・ラ峠付近
(4,890m)



カ経由で入る。空港は首都ティンプーの、20kmほど西のパロという山村にある。着陸態勢に入ってから、山すれすれの旋回にはいささか驚いた。ホテルに入る前に、高度順化をかねて、チェレイ・ラ峠（標高2,570m）までバスで登った。そこでさっそくメコノプシス・パニクラータの群落、プリムラ・スミソアーナ（シッキメンシスに似ている）、イリス・クラルケイの群落、緑の釣鐘メガコドン、そして青いケシ、メコノプシス・シンプリキフォリア、キプリベディウム・ヒマライクム（ヒマラヤアツモリソウ）、白い大輪のアネモネ・ルピコラ等々、初日の足慣らしで30種以上の特記に値する植物達との出会いがあった。

それから2日間は川沿いの森林の中に行くことになる。夥しいアセビの道を歩いた。天気はモンスーン真っ只中には比較的良好、傘をさしたのは2日目の午後1時間足らずだった。途中で後発の馬の列に追い抜かれたりしながら、次から次に出てくる花々のウオッチングを楽しんだ。メコノプシスも前出のシンプリキフォリアの他に、プリムラもかなり見つけることができた。また希少種のキプリベディウム・エレガンスを妻が見つけ、ガイドを喜ばせたりした。ヒマライクムも多い。見渡すかぎりのプリムラ・シッキメンシス、白いクレマチス、その他マツムシソウ、フウロソウ、アンドロサケ等々、50～60種以上の特記すべき花との出会いがあった。キャンプ場に着くと既に設営が終わっていて、快適なテントにすぐ入って午眠が取れるのが有り難い。食事は全員でメインテントで摂る。一応スープから始まり、デザートは缶詰の果物がついた。朝食はお粥かトースト、コーヒー、紅茶を自由に飲む事ができた。

キャラバン3日目はチョモラーリ（7,320 m）が見え

るシャンゴタンのキャンプ場で迎えた。山頂はほんの一瞬しか見られなかったが氷河の向こうに聳える峰はさすがに迫力がある。ここは2泊の予定なので終日チョモラーリ氷河方面の広いお花畑でウオッチングを楽しむ。前出のメコノプシス・パニクラータの咲き始めの株が群落を作っているのが圧巻だった。この日も終日晴天で30～40種の花々を数えることができた。

そして6日目、朝の登りはかなりキツかったが、待望のメコノプシス・ホリドウラの立派な株をたくさん見ることが出来た。そして同じ瓦礫の斜面に転々と、メコノプシス・ディシゲラやラケモーサと思われる大きな株が数え切れない程咲いている。その間にセツレンや、やはり綿毛に覆われたエリオフィトン、地面にピッタリ着けた大きな葉の中心に紫の花を着けるエリオフィトン、数種のプリムラ、ウスユキソウなどなど、まさに楽園に遊ぶ至福の時間を過ごすことが出来た。

そして7日目、苦しい登りの果てボンテ・ラ峠の瓦礫の斜面で、ようやくワタゲトウヒレンに会う事が出来た。岩の間に真っ白な綿毛に包まれてうずくまる様に咲いているそれとの対面は、チベットでのレウム・ノビレ以来の感激であった。

その後は2日かけての下山だったが、終始花の絶え間がない、素晴らしいルートだった。途中の斜面にキプリベディウム・チベティックムの見事な小群落を私が見つけ、そこで小一時間も撮影の時間を費やしてしまった。やや深い谷の向こうの斜面にボンボリトウヒレンが幾株か生えていたが、行く事は無理と思われ諦めた。そこからの下りは永遠と思われる程長く傾斜も強かったが、最後のキャンプ地手前でようやく平坦になり、心配していた膝痛も起こらず、無事に行程を終える事ができた。